

寄る辺なき時代を生きる子どもたち

芹沢 俊介

1

昨年五月二十八日(二〇一九年)、神奈川県川崎市の登戸駅付近の路上で、私立カリタス小学校のスクールバスを待っていた生徒、保護者らを、一人の男が刃物で襲い、二人を殺害、三人に重傷を負わせ、自らもその場で自害して果てたのだった。

殺害対象としてカリタス小の児童、保護者を狙った点で選択的であり、カリタス小の関係者であれば誰でもいいという点で無差別的である。筆者が選択的無差別殺傷事件と呼んでいる犯行形態である。犯行者は岩崎隆一(51)。動機は不明である。

岩崎隆一に関して報道されたことで注目すべき点が二つあった。一つは、彼の部屋である。テレビ、ゲーム機以外に何もなく、整然としていたというのである。押収品は二、三の古雑誌とノート一冊。直感的にこの空洞状態は、彼の内面そのものだと思った。

二つ目は岩崎が遺棄された子であったということだ。早くに両親が離婚、彼を置き去りにして失踪していた。幼い隆一は、伯父(父親の兄)夫婦に引き取られ、以来、五〇年近く伯父夫婦の家族とともに生きてきたのである。しかし同居はしていたものの、彼が伯父夫婦の家族と馴染んだ形跡はない。彼は次第に寡黙になっていった。中学卒業後の進路を同級生や近隣の人も知らない。自分を消去するようにして生きていたに違いない。寄る辺がどこにもないという絶対的な孤独。

事件の目的を、巻き込み型自殺だとみなした人たちは、ネット上に、「死ぬなら一人で死ぬよ」という非難の言葉をいっせいに書き込んだのだった。

このような傍観的な言葉に、私の感情は咄嗟に次のように反応したのである。一人で死ぬとはどういうことか、どうしたら一人で死ぬのか、キミらは考えたことがあるのかね。自力の処理が困難な失敗をしかけておいて、そ